

19世紀末朝鮮の北方漢語資料『華音撮要』の研究

—— ハングル音注を中心に ——

更 科 慎 一

1. はじめに¹

本稿において取り上げる『華音撮要』という文献は、朝鮮で作られた中国語会話の学習書である。東京大学文学部小倉文庫所蔵(L174580)。写本で、書写年代は光緒三年丁丑(1877年)である。

『華音撮要』の書名は遠藤光暁編『《翻訳老乞大・朴通事》漢字注音索引』所載の「老乞大・朴通事研究文献目録」に録されている。小倉文庫以外の所蔵は記されていない。

1.1. 『華音撮要』の内容

『華音撮要』は、66葉1冊から成る。序や跋はない。内容上、少なくとも三つの部分に分かれる。第一部分：1a(第一葉オモテの意。ウラはbで表す、以下類推されたい)-24b。会話。中国での商取引のようすが題材になっている。本文の漢語が漢字で書かれ、その右横にハンゲルの小さな字で音注がしてある。声調の音注はない。朝鮮語訳はついていないが、ただ各漢語文の終わりに朝鮮語の終助詞の類が走り書きされている。

第二部分：25a-52b。会話。本文の漢語のみで、朝鮮語訳はもとよりハングル音注もない。

第三部分：53a-66b。短い会話(“伏兵答問”、“開市問答”、“勅使問答”)、慣用句(“日用行語”)、単語(“日用雑語”)など。この部分の特徴は、漢字とハングル音注のほか、朝鮮語訳が施されていることである。

最初の二つの部分は、音注の有無を除き内容的に相互の等質性の高い印象であるが、第三部分は、第一・第二部分とは異質の感がある。内容的にそうであるだけでなく、記録された漢語の性質においても違いが見られる。まだ精査をしていないが、今、音注方面に限り、第一部分と第三部分の目についた違いを任意に取り出して見てみることにしよう：

比較項目	第一部分	第三部分
イ、“去”字音注	cui ²	ke~cui
ロ、“給”“黒”字音注	gy, hy	gyi, hyi
ハ、“説”音注	suw	siuie
ニ、“児”字音注	er	@r
ホ、“没有”音注	mu-iが多い	mu-iw

へ、兒化音の音注	あり	なし
ト、声母 f の表記	p	v(ڤ), p, b
チ、尖団音の区別	大部分失われる	大部分残る
リ、完了の語気助詞	咧nie	了riao

音注のこうした違いについて、ニ、トなどは単に表記方法の違いと見なすこともできるが、他は記述している漢語方言の違いを反映していると考えざるを得ない。こうした音注の違いを見ても、第三部分は、成立事情が第一・第二部分と明らかに異なり、この二部分とは別個の資料として扱うべきものであることがわかる。

1.2. 他の朝鮮資料との関係

周知のとおり、李氏朝鮮(朝鮮朝)は、その前の高麗時代同様、中国との外交を重んじた。太祖2年(1393)に司訳院を設置し、以来19世紀末まで、『老乞大』『朴通事』を初めとして、ハングル音注のついた多くの中国語学書を編集してきた。

『華音撮要』(以下、必要に応じ省略して『撮要』と呼ぶ)と同時代の中国語学習書のうち、比較的名を知られたものに、『華音啓蒙』(1883年序)及びその『諺解』(刊年不詳)があり³、音注に対する研究論文もいくつかある⁴。

『華音啓蒙諺解』(略称:『啓蒙』)のハングル音注は、『華音撮要』と同様、声調を記載しない。そして、他にも『撮要』と共通する特徴を多く含む。例えば、濃音表記 ss-, sg- の出現、“三”が時に拗音表記され ssian となること、“包”が主母音 e を含んで bew となること、山撮三四等開口字のうち見母字だけが-ian韻母で現われ他の声母のもとでは-ienで現われることなどである。ただし、見系細音(いわゆる団音)のg, k, h表記がほとんどない点や、兒化を記録しない点などが『撮要』と異なる。個別の字の音注で一致しないものも少なくない(一例だけ挙げれば、“街”、『啓蒙』 jiei, 『撮要』 gia)(以上、『啓蒙』の音注については鶴殿(1985)、特にその同音字表を参照)。

『華音撮要』と一層関係が深いと思われる朝鮮資料に、福田(1995ab, 1997)の紹介する会話書『你呢貴姓』(略称:『你呢』)がある。この資料の詳細は福田氏の論文に譲るが、『撮要』と同じく写本の会話書であって、扱う題材も『撮要』と同じく商取引である。ハングル音注が付けられているほか、朝鮮語の訳が附されている。音注は全体に『撮要』と共通し、中でも兒化音を記している点が著しい共通点である。

『你呢貴姓』の会話文には、『撮要』と同じもの、あるいは類似したものがいくつかあり、両者の密接な関係を窺わせる。例えば(『你呢貴姓』の文と会話番号は福田(1997)による):你呢從家裡幾時起身來着/這箇月初頭打家裡起身昨箇纔到來啊(『你呢』第9、10会話)と王大哥你打家裡幾時起身幾時來到啊/這箇月初頭打家裡起身昨箇纔到來啊(『撮要』冒頭の文)

また：

王大哥你呢寡听见死高麗的話(『你呢』第57会话)と王大哥你呢寡听见死高麗的話呢(『撮要』8b、第7行)などである。

『華音撮要』と最も関係が深い朝鮮資料は、筆者の知る範囲内では『中華正音』⁵である。この資料もまた写本で、書写年代は、末葉に「癸未【1883年】五月 日 冊全 李写」とあることから、1883年と推定される。『華音撮要』の第一部分の初めから第二部分36b第8行までに相当する部分と全く同じ会話文が書写され、これにハングル音注と朝鮮語訳が附されている。『華音撮要』は第二部分の音注と第一・第二部分の朝鮮語訳を欠くので、研究上『中華正音』の参照が重要であるが、ただ第一部分の音注を比較してみると『華音撮要』と一致しない点が見られる。筆者はまだ完全に検討してはいないが、『中華正音』の音注は『華音撮要』と比べて表記の揺れが少なく、整った印象を与え、また兒化した語が『華音撮要』に比べてやや少ないようである。なお、汪維輝編著(2005)《朝鮮時代汉语教科书丛刊》中华书局、全四册『朝鮮時代漢語教科書叢刊』に、『華音啓蒙諺解』と『你呢貴姓』の影印が収められている。

1.3. 『華音撮要』記載漢語の性格

1.3.1. 会話の舞台と方言的特徴

『華音撮要』の本文は、内容が具体的であり、地名や人名などの固有名詞が多く見られる。特に地名は、『撮要』の記録する漢語の地方的性質を明らかにする上で一定の参考になるであろう。なぜならば、『撮要』が描いている架空の商取引が、中国のある特定の地方で行なわれたものであるかのように設定されているとするならば、その会話文に用いられた漢語が、その地方の純粹な方言であるとは考えがたいにしても、その地域で当時広く通用していた漢語であると考えて、大きな誤りはないと思われるからである。

『撮要』の会話文の舞台について考察するには、『撮要』と関係の深い『你呢貴姓』の状況をも踏まえることが有益である。福田(1995a)は、『你呢』の会話の舞台を、会話に出てくる地名から割り出している。福田氏は、

我在邊門口作過三十多年的買賣。

などの会話文に出る「邊門口」という場所を考証して、清・博明希哲《鳳城瑣録》の“邊門在鳳凰城東南三十里，鳳凰山之麓。(中略)是為朝鮮之道。”という記載に見える“邊門”に同定し、会話の舞台を今の遼寧省鳳城付近であると特定した。

一方、『撮要』には、福田氏の挙げた会話文とほぼ同じ

我却是在邊門上作過多少年的生意。(8a・9行目)

が見えるほか、“鳳凰城”も次の二箇所に見える：

橫豎這鳳凰城幾個舖子裡有同本的沒有同利的呢(15a・4行目)

他們拿弄人家的緣故、這鳳凰城各處舖子裡都不肯惹他們的(17b・2行目)

文中に“這鳳凰城”(この鳳凰城)と見えていることから、『撮要』の会話の舞台もやはり『你呢』と同じ遼寧省鳳城付近であると考えてよいと思う。なお、『撮要』には、このほかにも、瀋陽、遼東、遼陽、蓋州など、遼寧省東南部の地名が多く見える。

福田氏は慎重なことに、『你呢』の記録する言語を即ち鳳城の方言なりとは決め付けずに、本書の漢語に認められる種種の特徴も、或いはこの一帯の方言が反映されているのかもしれない。

としている(福田1995a、205頁)。筆者も同じ見方を取りたい。ただし、地名が特定されていることでもあり、遼寧省の方言の概要をここで見ておくことにも意義があろう。

賀(1986)《東北官話的分区(稿)》に“東北官話分区図”が載せられている。この地図を見ると、東北三省はほとんどが、言語的に北京語と非常に近い“東北官話”の地域であるが、ただ『撮要』(及び『你呢』)と関わりの深い遼寧省中朝国境地帯～遼東半島のみは、東北官話と膠遼官話の二つの方言区域の入り乱れた複雑な様相を呈している。例えば鳳城や瀋陽は東北官話(通溪片)であるが、蓋県(現蓋州市)などは膠遼官話蓋桓片、遼東半島の大部分は膠遼官話登州片の地域であるとされている。従って、『撮要』の記す漢語中の方言的要素の考察に当たっては、東北官話のみならず膠遼官話も視野に入れる必要がありそうである。

ちなみに、賀(1986)の挙げる東北官話の特徴の一つに、北京語のr声母がゼロ声母に読まれることがある。賀(1986)氏の挙げる字例は如=魚[y]、饒=搖[iau]、柔=油[iou]、肉=又[iou]、染=眼[ian]、人=銀[in]、軟=遠[yan]、瓢=羊[iaŋ]、熱=夜[ie]などである。後に見るように、『撮要』のハングル音注も、これと全く同じ状況を示す。

1.3.2. 「外国資料」としての特質

日下(1980)は、上掲の朝鮮資料『華音啓蒙』に多くの奇妙な中国語が見られるとして、いくつかの虚詞の語順・用法の問題や、疑問詞と文末助詞「麼」の共起などに言及している。そして、“朝鮮資料の個々の課本の漢語を先ずあるがまゝに記述することは必要な作業であるが、そこに見られる漢語が当時漢土で話されている姿をそのまま写したものと速断するには極めて危険を伴うことを常に念頭に置く必要がある(日下(1980)、2頁)”と指摘している。また、福田(1995a)は、『你呢貴姓』に「多少…嗎」のような「破格」語法が見られると指摘している。

このように、19世紀末の朝鮮資料に、中国語としては破格であるように見える要素が含まれていることが指摘されている。『撮要』もこの例に漏れない。例えば、次のような例が、本文の初めのほうから頻出する。

疑問詞と“嗎”の共起：你在誰家店存嗎(1a 5行目)(『中華正音』による朝鮮語訳：nei nui-jib-diem-sie me-mug-ne-ni、すなわち「お前は誰の家の店に泊まるか」。me-mug-なる語形は聞しえず、me-mu-(r)-「泊まる」の意か)

“是”の破格用法：這個是瞞不得你(2a 3行目)(『中華正音』による朝鮮語訳：i-ge-syn ne-ryr sog-i-di an-nen-ge-si-ra、すなわち「これはお前を騙さないことだ」)

本稿では音注の問題を扱うため、このような語法の問題は今後の課題としたいが、本資料の性格を知る上で、注意しておく必要のある現象である。

1.4. 本稿の考察範囲と目的

本稿では、『華音撮要』研究の初歩的段階として、ハングルでつけられた音注(及び、漢字に直接付けられたある種の補助符号)に対する分析を行う。音注を整理し、ハングル表記の特色と、音注の背景にある漢語の声母及び韻母の体系を明らかにすることを試みる。『撮要』の特色である児化韻の表記についても考察する。なお、残念ながら、『撮要』の音注は声調を記述しないため、声調に関する考察はほとんど行うことができない。最後に、附録として(声調は捨象して、であるが)同音字表を示す。

上述の如く、『撮要』は、複数の部分から成っており、音注があるのは第一部分と第三部分である。また、第三部分に記録された漢語の音韻体系は、第一部分とはやや異なっている。そこで、本稿での考察は、第一部分の音注に限定する。

2. 声母体系の検討

2.1. 声母全体

ハングル表記を帰納すると、次の16種の異なった初声(頭子音)⁶を取り出すことができる。

唇音類：b p m
舌音類：d t n r
牙音類：g k h
 sg
齒音類：j c s
 ss
零初声：(')

2.2. 類ごとの考察

2.2.1. 唇音類 b, p, m

まず b と p の関係を明らかにするために、いわゆる三十六字母の幫母(全清)、滂母(次清)、並母(全濁)に属する漢字の音注をいくつか挙げよう(全ては挙げない)。

幫母：ba八、bi比、bei北、ban半、bien變、bing冰

滂母：pa怕、po破、pu舖、pien偏

並母：p-となるもの、pi皮、p@i牌、peng朋；

b-となるもの、ban伴、bing並、bei備、ban辦、ba拔、b@i白

即ち、幫母はb、滂母はpで現れる。並母は、pで現れるものとbで現れるものとに分かれ、その条件は中古の四声の別である：平声字が前者を取り、仄声字が後者を取る（伴並は上声、備辦は去声、拔白は入声）。こうしたbとpの関係は、言うまでもなく、現代北京語などの北方漢語方言における無気音と有気音の関係と同じである。そして、唇音だけでなく、舌音のdとt、牙音のgとk、齒音のjとcの間にも、全く同様の関係が見られることを、繰り返して言及することを避けるためここで明言しておく。

mは、現代北京語の m^7 と完全に対応する。字例は、同音字表を参照。

fについて。北京語を初めとする多くの現代北方方言にはfがあるのに、ハングル表記にはb, p, m だけがあって、fを示す表記がない。本資料では、北方方言のfのほとんどがp-で現われる：

pa發法派打~、pu夫袱福付咐婦、pui費、pan翻煩飯、pun分墳、pang方防妨放房、peng風、pung封風鳳

これは、この資料の漢語が軽唇音化を経験していないことを示すのではなく、fの音を欠く朝鮮語の話手が、この声母に対してpを当てたものとして説明すべきものである。

第一章(1.1.)で述べたように、『撮要』の第三部分のハングル音注では、漢語のfに対して特にv(ᄃ)が当てられている。vは訓民正音創製当時の字母の一つで、中期朝鮮語に存在し、現代朝鮮語ではゼロ化した有聲の両唇摩擦音[β]を表す。司訳院などの語学書では、vが漢語の軽唇音fの表示に用いられている。第三部分のv表記も、この伝統を受け継いだものであると言い得る。しかしながら、この資料の書かれた19世紀末葉において、実際の朝鮮語の音韻体系には、現在と同様、fはもちろん、唇を使った摩擦子音が全くなかったと考えられる。このため、第一部分では、vのような特殊な符号を用いず、閉鎖音ではあるが帯気性があり聴覚的にfに似たpが用いられたのであろう。ちなみに、現代朝鮮語でも、外来語のfはpで写されている。例：pain“(英語)fan(<fanatic)”

(唇音字の例外)

“暴”(並母去声)はb-が期待されるのにp-で現われている。朝鮮漢字音pogに引きずられたものか。また“販”(非母)はp-が期待されるのにb-で現われているが、例外の生じた理由を明らかにし得ない。

2.2.2. 舌音類(1)：d, t

dは現代北京語のdに対応し、tは同じくtに対応する。例外は次の二字である。

d@i在

tu~tun村-子

“在”は、複合語中では j@i という音注が付けられる一方、介詞として用いられる時は上のよ
うに表記される。動詞として用いられる場合、d@i, j@i の両方が見られる。また、結果補語の
位置に現れる“在”は“得”字で表記され、de と表記される。例：

在 j@i：實在的話 si j@i di hoa (2a・3行目)

在 j@i(動詞)：狗錢卻是不在內啊 gyw cien ke sy bu j@i nei ia (9b・4行目)

在 d@i(動詞)：李賑櫃的在家嗎 ni jang guei di d@i gia ma (12b・9行目)

在 d@i(介詞)：橫豎我們在這里住十來天 hyng su ue mun d@i jei ri ju sir n@i tien (1b・6
行目)

得 de：那個是有得那里啊 na ge sy iw de na ri ni (4b・4行目)

『你呢貴姓』にも、“在”に j@i, d@i 二通りの音注があるが、『撮要』とは異なり、d@i と読ま
れるのは介詞の場合のみで、動詞の場合は j@i で表記されている(福田1995a)。

福田(1995a)は、“在”の dai という字音が北京、天津や東北地方に行われていることを指摘し
ている。また、北大中文系(1989)で“在”の方言音を調べると、“在”を [tai] またはこれに類す
る音でも読む地点は北京、済南、武漢、成都など(146頁)で、北方方言のかなり広い地域に分布
する音である如くである。

“村”の例は、“村子”を tun-jy もしくは tu-jy と表記した例である。“村子”と書かれてい
るが、現在“屯子”と書かれる語を表記したものと考えられる。tu-jy の tu は韻尾の -n が表記さ
れなかったものか。

2.2.3. 舌音類(2)：n, r

この二者が表記している漢字の中古声母は、泥母(現代北京：n)と来母(現代北京：l)である。
ハングル表記 n：泥母、ハングル表記 r：来母という対応関係が事前に期待されるが、実際はそ
うではなく、中古声母の泥母、来母の別を問わず、n が表記された例が圧倒的に多い。一見する
と、長江以南の漢語方言に多い「n、l 不分」のごとき状況である。

ところが、ハングル表記を仔細に検討してみると、漢語の側では n と l の区別が確かにあるこ
とがわかる。この資料の来母字は、極めて複雑な表記上の振る舞いをするが、おおかた次のよう
な現われ方をする：

(1) 語の第一音節にあるときは、全て n で表記される。例：

來的時候/兒 n@i di sw hur

兩種 niang jiung

漏信/兒 nyw sir

李夥計 ni ho ji

(2) 語の第二音節以下にあるときは、次のような現れ方をする。

(2)-1 直前の音節に -n 以外の終声があるときは、全て n で表記される。例：

到來 daw n@i
好冷 haw nyng
商量 siang nang
想來 ssiang n@i
二來 er n@i

(2)-2 直前の音節に終声がない場合、直前の音節に -r 終声を添えた上で n 表記を採る。例：

拿來 nar n@i
是咧 sir nie
怪冷 kuair nyng
賣來 m@ir n@i

(2)-3 直前の音節に -n 終声がある場合は、-n 終声を -r に変えた上で n 表記を採る。例：

三領 ssar ning (“三” の通常の表記：ssan)
進來 jir n@i (“進” の通常の表記：jin)

(2)-4 接尾辞の “裡” は、直前の音節に終声がない場合、及び -w 終声がある場合、ri と表記される。例：

這裡 jei ri
家裡 gia ri ~ jia ri (jia ri という表記もある)
頭裡 tyw ri

(2)-5 (2)-4以外の場合にr表記が採られた例

不離 bur ri
秋里 ciw ri
妙理 miau ri
高麗 gew ri
一兩 ir riang
胡弄 hu rung
拿弄 na rung
弄不來 rung bur n@i

これに対し、泥母字はいかなる場合も n 表記で、第二音節以下にあっても直前の音節に -r を加えるなどの作用を及ぼさない。例外は僅かである：

打派你 da par ni
大難子 dar ran jy

来母字の複雑な表記法は、朝鮮語の n, r の分布を知ること、その理由をほぼ理解することができる。

r は、現代朝鮮語において、次の位置に現れない。

①語頭。外来語(朝鮮漢字音を含む)でこの位置に r がある場合は、n またはゼロと交替する。

朝鮮漢字音の例：魯 ro→no、李 ri→i

②-r, -n 以外の終声の直後。この位置に r がある場合は、n と交替する。例：十里 sib-ri → sim-ni(この場合、r の直前にある終声の側でも音声交替 b→m が起こることに注意)、総理 cong-ri→cong-ni

本資料における来母字の表記法(1)、(2)-1は、それぞれ、朝鮮語の r の出現しない位置①、②に当たっている。そのゆえに n 表記がなされている、と考え得る。

しかし、①②以外の位置、例えば第二音節以降にあって直前に終声がないか、あるいは -n 終声がある場合には、朝鮮語での r の出現が制限されないのに、その条件にある(2)-2, (2)-3の来母字が r 表記されず、相変わらず n 表記されているのは、いかなる理由によるものであろうか。

この問いに答えるには、(2)-2, (2)-3において直前の音節の末尾に置かれた -r 終声手が手がかかりになる。

朝鮮語の r の音声は、概略、初声では[r](弾き音)、終声では[l]である。さらに、[-nまたは-r終声+r初声]の結合では、長い[-ll-]が現れる。この長い[-ll-]は、[-r終声+n初声]の結合においても実現する。中国語の l 声母は側面音[l]であって、朝鮮語の r 初声とは似ず、母音間の長い[-ll-]に似ている。本資料の来母字に r 表記されたものがごく少ないのは、朝鮮語の r 初声の音声的性質が中国語の l と異なるためである。一方、(2)-2, (2)-3のハングル音注は、来母字の直前の音節末にわざわざ -r 終声を置くことによって、中国語の l 声母にいちばん近い長い[-ll-]を発音させようとする意図に出るものに他ならない。

l 声母に対する r 表記の現れる(2)-4, (2)-5の用例を眺めると、ri 音節の例が多い。この漢語の l 声母は、i 韻母の前では朝鮮語の ri にやや近く発音されたのだろうか。興味深い。

以上の考察から、来母字(l声母)を n で表記した例の大部分は、漢語側ではなく、朝鮮語側の要因によって説明すべきであることが判明する。

2.2.4. 牙音類：g, k, h; sg

それぞれ、現代北京語をはじめとする多くの北方方言の g, k, h に対応している。例外は、すぐ後に述べる見母細音字の場合を除くと、“怪~ㄱ”の一字が無気音 g ではなく有気音 k で現われる例があるのみである。“怪”字は、恠と書かれ「責める」を意味する形態素においては g 表記が現われている。“怪~ㄱ”の“怪”が有気音で表記されているのは誤記か、強調的副詞の強調的

発音(現代語の“真是!”が chenshi と発音される⁸類いの)を写したものであろう。

下の諸字は、ハングル表記は g, 現代北京音は j である:

gia 家傢~伙架價街; gi 雞幾今~年; giaw 叫教; giw 九舊; gin 今; ging 景

これらはすべて見母及び群母(仄声)の細音字である。これらは、現代北京語とは異なり、破擦音化がまだ起こっておらず、g-の音を保存したものと解釈される。一方、精母(及び平声従母)細音の反映と同じ j で表記される字は

ja 家; ju 究句矩; jui 居; jan 件; joan 眷; jang 薑講; jia 加家稼; ji 急幾季計今~年; jiaaw 交脚叫; jian 件見建間; jin 斤金筋; jiun 均; jiang 薑; jing 京更三~

であり、g 音を保つ字よりもずっと多い。“家”、“今~年”のように g~j の揺れを見せる字もある。g を保存する字は、どちらかという口語で常用するものが多い。なお、“街”のハングル表記 gia は現代北京語の jie とかけ離れており、“街”が満洲語に借用された形式 giya と近似する点、興味深い。

溪・群(平声)・曉母細音字のハングル表記には全て c, s, ss が現れて k, h 表記の字は一つもなく、いわゆる尖音と団音の合流が完成した状態である。

総じて言うに、『撮要』の漢語は尖団合流がかなり進んだ状態を示しているが、ともかくも破擦音化の起こっていない g- 表記の字が見られることは注意すべきであろう。

sg については、後述する(2.2.7.)。

2.2.5. 齒音類: j, c, s, ss

この四字母に対応する語音は複雑であり、大体下に示すとおり四つの来源を持つ:

群	中古声母	現代北京語
I	精組洪音 ⁹	z, c, s
II	知/照二三等	zh, ch, sh
III	精組細音	j, q, x
IV	見組細音 ¹⁰	j, q, x

すなわち、現代北京語の三組の破擦/摩擦音が全て j, c, s, ss で現われた形であるが、中声(母音)部分の表記、特に主母音直前の -i- の有無に着目すると、一定程度の書き分けが見られることがわかる。

2.2.5.1. 直音表記と拗音表記

以下、主母音直前に -i- を含まない母音表記(a, oa, e, ue, o, u, y, @i, oai, ei, uei, ui, aw, ew, uw, yw, an, oan, en, un, yn, ang, oang, eng, ung, yng, er)を“直音”、-i- を含む母音表記(ia, ie, oie, uie, iu, i, iei, iui, iaw, iw, ian, oian, ien, oien, uien, iun, in, iang, ieng, iung, ing)を“拗音”と呼んで、齒音類の全ての字を上掲の I~IV の四つの群と直拗によって分類して示すと、下のようになる。

· j

(1) 直音

I ja咱砸雜；jo昨坐作座；jy子字自怎～麼；j@i再在；jui嘴；jaw遭早噪；jyw走；jan暫；jun尊

II joa抓；ju主囑住；jy只～管枝；joai跣；jei着；jaw着和不～找；jyw州；jan站；joan賺轉；jang掌漲；joang庄粧裝

III jei接借；jaw焦嚼；jan賤

IV ju究句矩；jui居；joan眷；jang講

(2) 拗音

I (なし)

II ji知直值治；jin針；jiun准；jiang帳賬；jieng正；jiung中重種；jing睜正

III jiw酒；jin津盡對～進；jiang將；jing睛津天～團

IV jia加稼；ji急幾季計今～年；jiaw交腳叫；jian見建間；jin斤金筋；jiun均；jing京更三～

(3) 直拗に揺れ

I (なし)

II jang～jiang張；jei～jie～jiei這；jaw～jiaw照

III ju～jiu～jiw就

IV ja～jia家；jan～jian件；jang～jiang薑

· c

(1) 直音

I co矧；cy次；c@i財纜菜；caw草；cyw湊；cun存；cyng層

II ca查；cu出初廚處；c@i柴；cui除；coan穿船；cyn陳；cun春；cang償場

III cui取娶；cung從

IV cui去

(2) 拗音

I (なし)

II cie車；ci喫；ciaw招；cien纏；cieng稱成城盛；cing成

III ci齊；ciw秋；cien千前錢；coien全

IV ci欺騎起氣；ciaw招；ciw求；coien拳勸；cing情

(3) 直拗に揺れ

I (なし)

II (なし)

III caw～ciaw瞧

IV caw～ciaw橋

・s

(1) 直音

I sy思；sui隨碎歲

II su叔書贖數樹豎；sy時事；sei賒；sui誰水；suu說；syng生牲繩

III su絮；sei寫卸謝；sui徐俗

IV (なし)

(2) 拗音

I siung訴告～

II sia少多～；sie捨～不得；si十石拾食實識甚～麼瀋～陽；siaw少；siw收手受；sin身；siang商响上；sing聲

III soie雪；si西席媳細；siaw笑；sin心新信；siang廂想像；sing姓

IV sia匣下；si喜；sien閑；siang向；sing興行

(3) 直拗に揺れ

I soan～soian算

II sy～si是；sung～siung時何～

III sei～sie些；sang～siang相

IV (なし)

・ss

(1) 直音

I ssy死四

II ssy使事

III、IV (なし)

(2) 拗音

I ssian算；ssiung送

II si十；ssiaw少

III ssia小；ssiaw小笑；ssien先線；ssiang想

IV ssia下；ssien嫌現；ssiung兄

(3) 直拗に揺れ

I ssan～ssian三

II～IV (なし)

今、I～IVの各群について、直拗の中声と共起した字の字数を調べて見ると、次表のようである：

群	直音	拗音	揺れ
I	35	3	2
II	49	44	5
III	14	32	4
IV	7	38	4

この統計から、次のことが言える。

- ① I (精組洪音)は、直音と共起することが圧倒的に多い。
- ② III、IV (精組及び見組細音)は、拗音と共起することが比較的多い。
- ③ II (照組)は直拗いずれとも同じ程度に多く共起する。

2.2.5.2. I群及びIII・IV群の音価と傾向の例外

前項の考察から導き出された①、②の傾向に対しては、現代北京語においてI群声母(z, c, s)が「スー音」の聴覚印象を持ち、III、IV群声母(j, q, x)が「シュー音」の聴覚印象を持つことを考えれば、スー音に直音表記が当てられシュー音に拗音表記が当てられたという、至極当然な解釈を与えうる。『撮要』の漢語においても、現代北京語におけると同様、I群に[ts, tsh, s]を、III、IV群に[tɕ, tɕh, ɕ]をそれぞれ再構することに問題はない。

①の例外は、次の3字である。

siung 訴告 ~ | ssian 三 | ssiung 送

②の例外は、次のとおりである。

IIIにもかかわらず直音が現れるものは：

su 絮 | jei 接借 | sei 寫卸謝 | cui 取娶 | sui 徐俗 | jaw 焦嚼 | jan 賤 | cung 從；

IVにもかかわらず直音が現れるものは：

ju 究句矩 | jui 居 | cui 去 | joan 眷 | jang 講

である。

これらの例外が生じる原因の一つには、次のような朝鮮語の音韻変化の要因が考えられよう。

朝鮮語の母音における直音と拗音の対立は、19世紀に至って、歯音 j, c の下で中和し、文献の上からも混同が多く見られるようになったという(『韓国語の歴史』224頁)。現代朝鮮語の少なくともソウルを中心とする標準語においては、例えば文字面 ja と jia、ce と cie の間に音韻的対立がない。19世紀後半に作られた『華音撮要』に同様の状況を想定することは、完全に合理的である。実際、同一の字に対する直音表記と拗音表記の間の揺れが、I～IVを通じて15字において見られたことは、朝鮮語における歯音下での直拗対立の中和を反映したものであろう。

III、IVに属する字の音注に少なからぬ直音表記が見られることには、以上述べた朝鮮語の音韻変化が背景にあると考えられる。但し、①と②の傾向が見られることから、直音表記と拗音表記が見境なく用いられたのではなく、シュー音的な子音には拗音を当てようとした一定の努力が見

られる。①の例外、即ち直音表記をすべきところに拗音表記を施した例が、②の例外、即ち拗音表記をすべきところに直音表記を施した例と比べてずっと少ないことは、音写者にとって拗音表記が有標で直音表記が無標であったことを物語っている。想像をたくましくするならば、このハングル表記を行なった人物は、j, cの発音がスー音的である北部朝鮮の人物ではなかったかと思える。

2.2.5.3. II群の直音表記と拗音表記

II群(照組字)は現代北京語では大部分が zh, ch, sh に当たる。2.2.5.1.の統計結果③に見る直拗両様の表記様相は、どのように解すべきであろうか。

このグループには、現代北京語の同一韻母字に対して、直音表記・拗音表記が対立する例がいくらかある。全て挙げる(同一字で直拗表記の揺れのあるものを除く)：

北京語韻母	直音表記	拗音表記
<u>ao</u>	jaw着找	ciaw招；siaw~ssiaw少
<u>ou</u>	jyw州	siw收手受
<u>an</u>	jan站	cien纏
<u>en</u>	cyn陳	jin針；sin身
<u>un</u>	cun春	jiun准
<u>ang</u>	jang掌漲；cang償場	jiang帳賬；siang商响上
<u>eng</u>	syng生牲繩	jing睜正；cing成；sing聲 jieng正cieng稱成城盛

ここに挙げたほか、現代北京語の zhi, chi, shi 音節に対する jy, cy, sy(ssy)表記と ji, ci, si(ssi)表記の対立例がある。これについては、韻母の章で検討する。

この対立に音韻史的な根拠があるかどうかを調べるために、両表記の声母の等を調べると、直音表記の側には二等系(知_二組、照_二組)の字が3つ(站(知母_二)；生牲(生母))あるのに、拗音表記の側は全て三等系(知_三組、照_三組)の字であって、二等系は一字もない(“睜”が二等系である可能性があるが、この字の音韻地位は目下不明である)。

また、直音表記との対立例を欠き拗音表記のみが見える -ie 表記を持つ II 群字 cie 車(昌母)、sie 捨(書母)は共に三等系であるが、拗音表記との対立例を欠き直音表記のみが現われる諸韻の字の中には、二等系がしばしばある(例：joang 庄粧(莊母)、c@i 柴(崇母)など)。

以上を要するに、II群の直拗表記と二等系・三等系の間には、次のような関係がある。

直音表記→二等系、三等系

拗音表記→三等系のみ

これをどのように解釈するかは難しい問題である。第一には、拗音表記の側に、同じように拗音表記が支配的である III、IV 群と同一の声母(即ち、[tʰ, tʃh, ɕ])を再構すべきか否か、そして否であ

る場合に、その音声は後部歯茎音([f]等)と反り舌音([tʃ]等)のいずれであるか。直音表記の側にも同様の問題がある。即ち、同じように直音表記が支配的であるⅠ群と同一の声母(即ち、[ts, tsh, s])を再構すべきか否かという問題である。直音表記と二等系・三等系の間にも同様の関係が見出されたからには、直音表記と拗音表記とが漢語の側で同音であったとは考えることができない。理論的にはいくつもの説を立てることができるが、問題の鍵は、Ⅱの直音表記に対して反り舌音を認めうるかどうかにある。言い換えれば、朝鮮人の耳に、反り舌音が、わざわざ拗音表記を取る気を起こさせるほどに際立ったシュー音性をもって響くことがなかった、と言いつつどうかである。三等系の諸字に直音表記が少ないことに関して言えば、『撮要』の漢語の現実の混乱状況の反映である可能性もあるが、Ⅰ群とⅢ、Ⅳ群の例外を解釈したときに述べたように、音写者にとって拗音表記が有標であったことを考慮すべきであろう。以上を要するに、現段階では、Ⅱ群の直音表記と拗音表記が、漢語の声母のある種の音韻的対立の反映であるということだけは明らかになったが、その音価(区別のされ方)や、Ⅰ群、Ⅲ・Ⅳ群との音韻論的關係については、明らかにできない。

2.2.6. 零初声

現代北京語と同様、中古の影母、喻母、疑母、微母を来源とするが、本資料ではこのほか日母もゼロで現われる。日母の例を全て挙げる：

i日；iei惹；iaw若；oian軟；ien然；in人認；iang嚷讓；er兒二

これらは兒二を除き、拗音表記が取られ、かつ現代北京語でr声母を持つ。r声母がゼロ声母化するの東北官話に多い特徴とされることを先に述べたが、『撮要』の零初声拗音表記も、この東北官話的特質の反映であろう。

2.2.7. 濃音表記について

本資料では、濃音表記sg, ssをもつ字が少数ある。

sgは、次の六字の音注に現れる。

幹趕_子跟懇剛更(趕剛更にはg-表記の例もあり)

この六字だけが特別の一類を成す漢語の側からの理由を見出すことはできず、一方朝鮮語やハングル綴字法の側の要因を見出すことも困難である。現段階では、音写者によって漢語の無気音のg声母が濃音的に聞かれたものが、たまたま上の六字の表記の上に固定されたものと推測せざるを得ない。

ssを持つ字はやや多く、18字ある(字例省略)。これらの字もまた、漢語、朝鮮語、及びハングル綴字法の点から特別の一類を成す理由を見出すことができないので、sgの場合と同様の推測を行なわざるを得ない。ssについては、sとの間に表記の揺れが見られる字が多い。例えば、少sia~ssia；siau~ssiau、事sy~ssy、想siang~ssiang。これらのうちには、使い分けの傾向を見出しうるものがある。

①十。“十包帽子”、“退十斤”など、「十」の前に数詞が何もない場合は濃音表記(ssi)が多く、“五十兩銀子”、“二十五歳”など、「十」の前に数詞のある場合は平音表記(si)が多い。

②少。濃音表記が一般的だが、“多少”の場合は平音(sia, siau)のほうが多い。

③想。“想來”では濃音(ssiang)、“方想兒”(注：『你呢貴姓』、『中華正音』の朝鮮語訳はerim。erim、概算、見積もり(大衆エッセンス韓日辞典、三修社、1991年)；估计(《朝汉词典》，商务印书馆，1978)。)では平音(siang)で現れる。

①～③を通観すると、語頭では濃音表記が、非語頭の強勢のない位置では平音表記が、それぞれ現れるという傾向を読み取ることができる。

なお、『華音啓蒙諺解』の音注(鶴殿(1985)の同音字表を参照した)にも濃音表記sg-, ss-が見られ、しかも濃音で書かれる字に『撮要』と共通のものがかなり多い点は注目される。例えば『撮要』において濃音表記である“乾懇剛更；十四使小少三現算兄”は、『華音啓蒙諺解』でも濃音表記である。

3. 韻母体系の検討

3.1. 韻母全般

ハングル表記を帰納すると、48通りの異なった韻母表記が現われる。帰納の結果を、例字とともに下に示す：

a八打查	ia家街下	oa寡花瓦		
e得各惡	ie咧車爺	ue鍋國我	oie雪	uie月
		o破多火		
y給子事	i皮你一	u福路書	iu就餘有	
@i百袋開		oai怪壞外		
ei北内借	iei這夜惹	uei櫃		
		ui每退	iui語	
aw帽	iaw妙吊腳			
ew袍包高				
yw頭口走	iw丟牛受	uw說		
an飯南安	ian件三言	oan短寬船	oian短算軟	
en本店天	ien邊天先		oien全拳勸	uien元原願
yn根肯陳	in閩林人	un分輪尊	iun准均雲	
ang方糖行	iang糧相嚷	oang光庄王		
eng朋風朦	ieng正稱成			

yng燈更層 ing冰停姓 ung東空從 iung中兄用

er兒二

ここで、李基文氏の推定する19世紀初葉の「近代韓国語」の母音体系及び関連する記述に基づき、朝鮮語の母音の音価について述べておく(李基文(1975)第八章、228頁)。

- ・ a, u, o, iの音価は、それぞれ、[a, u, o, i]である。
- ・ eの音価は、中舌の中母音[e]である。
- ・ yの音価は、中舌の高母音[i]である。
- ・ @はいわゆるarai a(・)。『撮要』のハングル音注では@iにのみ現われる。朝鮮語において、@は、非語頭にあって16世紀にyと合流し、語頭にあって18世紀にaと合流するに至り、母音音素としての地位を消失した(李(1975)、229頁)。従って、本資料の@iは、aiと同音と考えてよい。
- ・ 二重母音のai(@i), eiは、李基文によれば18世紀末葉に単母音化し、それぞれ[ɛ], [e]となった(李(1975)、227頁)。但し、この単母音化は朝鮮語において起こったことであって、これを根拠に本資料においてai(@i), eiで表記される漢語音までもが単母音化していたと主張することは当然できない。

3.2. 要素ごとの考察

3.2.1. 介音について

3.2.1.1. 開口呼(介音ゼロ)

『撮要』において、開口呼は、北京語と同様、i, u, üなどの狭母音要素のない母音表記として現れる。例外は、次の二つの場合である：

- ① 歯音類初声の下で拗音表記が見られる(既述。2.2.5.参照)。
- ② 唇音類初声の下で-u-表記が見られる(後述。3.2.2.2.参照)。

3.2.1.2. 齊歯呼(介音-i)

狭母音iの要素が現れる。但し、2.2.5.で検討したように、歯音類初声の下で直音表記が見られる。ほかにも次の例において、北京語にはある-i-が表記されていない：

- ① 舌音で：den店點；ten天(店にはdien、天にはtienの表記も見られる)
- ② ei表記で：bei別tei帖

①は、17世紀と18世紀の交替期以来、朝鮮語でdi, ti, ddiなどが口蓋音化しji, ci, jjiに読まれたこと(李基文(1975)、223頁-224頁。但し、この口蓋音化は、現在も西北方言では起こっていないとする)と関係があるかもしれない。

②は、ei母音が単母音化し前舌の[e]で読まれることに伴い、当時もちょうど現代朝鮮語におけると同様、直拗が中和(但しeiの前に子音があるとき。例：giei=gei=[ke])していたことを表すのかもしれない。

3.2.1.3. 合口呼(介音-u-)

朝鮮語の円唇母音は u, o の二つである。合口介音の表記には、u, o のどちらかが現れる。両者の使い分けは音色上の違いを意図したものではなく、ハングル字母の母音結合法則(母音調和)に従ったものである：陽母音である a の前では陽母音である o を用い、陰母音 e や中性母音 i の前では陰母音である u を用いる。

現代北京語の o/uo 韻母の対応は、次の三通りに分かれる。

- ①ue(g-の後ろで)：gue鍋國菓過
- ②uw(“説”一字で)：suw説
- ③o(その他の場合に)：po破；do多；ho活火伙夥貨和；jo昨坐作座

3.2.1.4. 撮口呼(介音-ü-)

撮口介音の表記には、主として iu または ui 表記が現れる。朝鮮語には北京語の撮口介音に対応する前舌円唇母音[y]のための字母がないため、複合的に表されたものである。

現代北京語の üe 韻母に属する諸字は oie~uien の表記を取り、同じく üan 韻母に属する諸字は oien~uien の表記を取る。この四韻の例を全て挙げる。

oie：soie雪

uie：uie月

oien：coien全拳勸

uien：uien元原願遠

oie と uie、oien と uien の書き分け条件について考えてみる。韻母を見た場合、現代北京語の観点からはもちろん、中原音韻以来の歴史上の北方官話一般の観点から見ても、“雪”と“月”、“全拳勸”と“元原願遠”はそれぞれ同韻であって、このように二つに区分する根拠を見つけることができない。一方、声母の観点からは、歯音声母(s, c)の後ろでoie/oienが、零声母の後ろでuie/uienが用いられていることを見出す。すなわち、oieとuie、oienとuienは、声母の条件による音声的異音を書き留めたものであり、音韻的にはそれぞれただ一つの韻母であったと解釈される。

oie, oien で表記された漢語音と、uie, uien で表記された漢語音との間に、具体的にいかなる音声的差異があったのかを探ることは難しいが、両者が韻母開始部分の o と u の差異の形を取っているからには、前者が開始部分において後者よりも開口度が大きく聞こえたと考えざるを得ない。

なお本資料では、このほか oian 韻母が短(doian)、算(soian)、軟(oian)の3字に現われる。うち短算の二字には、doan, soan で表記された例もある。現代北京語の uan 韻母は -oan 表記に対応するので、doian, soian の表記例は不可解である。一方の軟は、日母字である。日母字は本資料において[零初声+i]で現われ、本例もそれに従っている(2.2.6.参照)が、uien ではなく

oian で現れた理由は不詳である。

3.2.2. 主母音について

現代北京語の主母音は、音韻論的には、舌の高さについて低/a/, 中/e/, 高/i/の三項体系である¹¹。本節では、この枠組みにそって『撮要』の音注を分析してゆく。

3.2.2.1. 低主母音/a/

『撮要』では一般に a が現れるが、現代北京語の ian, üan に対応する韻母のみは、主母音が e となってそれぞれ ien, oien で現れるのが一般的である。現代北京語において、この二韻母の主母音が [ɛ] であることと平行する現象であろう。

現代北京語 ian の対応物にはもうひとつ ian があり、j, ゼロの後ろに現れる (üan の対応物にも、uien のほかに oian がある。oian と uien については、3.2.1.4. で述べた)。

jian : 件見建間

ian : 言眼

これらのうちianは、表記上ienと対立する。

ien : 煙縁~故然

ien と ian の区別は、『中原音韻』の寒山 (ian) と先天 (iɛn) の別を想起させる。但し、jian 音節のうち件見建、及び ian 音節のうち言は、『中原音韻』の寒山韻ではなく先天韻に見え、出現条件が一致しない。

そのほか特殊なものに、ao 韻母の個別的反映 ew がある。

bew 包 ; pew 袍跑 (包には baw 表記もある。)

gew 高

3.2.2.2. 中主母音/e/

通常、e か y のいずれかで現れる。

専ら e が現れるのは、韻尾がゼロまたは -i, -r の場合である。

de 得 ; bei 背北備 ; er 兒二

y が現れるのは -u, -n, -ng 韻尾の前であり、現代北京語の ou, en, eng に対し、それぞれ yw, yn, yng 表記が現れる。

北京 ou が yw に対応する例 : tyw 頭 ; gyw 溝 ; jyw 走 など

北京 en が yn に対応する例 : gyn 根 ; hyn 狠 ; cyn 陳 など

北京 eng が yng に対応する例 : dyng 燈等戡 ; nyng 能 ; gyng 更 など

但し、ew, en, eng 表記が少数見られる。

北京 ou が ew に対応する例 : gew 勾

北京 en が en に対応する例 : ben 本

北京 eng が eng に対応する例 : peng 朋風 ; meng 朦黑~~

韻尾-u, -n, -ngの前の主母音yがeとも書かれたのは、朝鮮人の耳にはそれがyとeの中間音のように聞こえたことを物語るものであると言える。

唇音の下では、ei に対してui、en に対してun、ong に対してung表記が見られる。

北京eiがuiに対応する例：pui陪費 mui每

北京enがunに対応する例：pun分墳；mun門們

北京engがungに対応する例：pung封風鳳

唇音下での-u-表記は、漢語史上の「唇音下の開合」と関連する問題のようであるが、朝鮮語の側の問題も絡んでいる。李基文(1975)によれば、17世紀末葉に、唇音下で母音yが円唇化してuになるという変化が起こった(228頁)。この結果、唇音下でのyとuの対立は失われた。これを踏まえると、唇音+ui, un, ungの表記は、実際にはyi, yn, yngを意図した表記である可能性が出てくる。

開口呼以外では、主母音の音声が介音に吸収されe, yの表記が顕現しないことが多い。例えばgung工共(guengに非ず)、jiun均(jiuenに非ず)、iw友有又(ieuに非ず)。eの顕現に揺れが見られる例：

北京語uei：guei櫃～gui規歸貴

北京語uei対応字のうち、uei表記は“櫃”のみで、他は全てui表記である。“櫃”だけがueiで書かれたことは、uei韻母の主母音/e/の開口度が第三声と第四声で開くという現代北京語に一般的な現象と関係付けられるかもしれない(但し、この条件にある他の字の韻母注音は全てuiである)。もう一つ考えられることは、“櫃”字が本資料で“(姓～)掌櫃的”「某旦那」という語のみに出現することから、呼びかけの場合の特殊な語調が表音に影響したのではないかということである。

3.2.2.3. 高主母音/i/

北京語のi 韻母はu、i 韻母はiで表記される。残る-i(zi, ci, si; zhi, chi, shi, riの母音)、üについて考察する。

3.2.2.3.1. -iの対応とy韻母

『撮要』にはyで表記される韻母があり、牙音系と齒音系に現われる。

牙音系：gy給；hy黑

齒音系：下のI、IIの如し

I (精組)jy子字自；cy次；sy思；ssy死四

II (知/照組)jy只～管枝；sy時事是；ssy使事

給、黒の二字は、現代北京語の音形式gei、heiと大きく異なる。侯、温(1993)699頁によれば、山西省東北部にあって北京市から程近い広靈県の方言に給[gw]、黒[xw]という読みがあり『撮要』と合致する。また、同省南部の運城、万栄、永濟では、黒を[xw]に読む(侯、温(1993)、173

頁)。

歯音系は、声母の章で行なった四分類に従ってⅠ群とⅡ群に分ける。

Ⅰ群は、すでに考察したとおり[ts, tsh, s]声母を含むので、これと結合する母音yは、当然、舌尖母音[i]を表記したものと解釈される。

次に、Ⅱ群を考察する。便宜上、[Ⅱ群+i韻]の字を合わせて考察することとする。なおi韻は、他の場合には現代北京語のi韻母に対応している：

(Ⅱ群+i韻)

ji：知直值治

ci：喫

si：十石拾食實識是

ssi：十

これらⅡ群字の中古音上の位置を調べてみると、yとiの書き分けの条件がほぼ明瞭になる：

[-y韻字]

只：章母・止撮

枝：章母・止撮

使：生母・止撮

事：崇母・止撮

時：禪母・止撮

是：禪母・止撮

[-i韻字]

知：知母・止撮

直值：澄母・曾撮(入声)

治：澄母・止撮

喫：溪母・梗撮(入声)

十拾：禪母・深撮(入声)

石：禪母・梗撮(入声)

食：船母・曾撮(入声)

實：船母・臻撮(入声)

識：書母・曾撮(入声)

是：禪母・止撮

以上を整理すると、

-y韻：[齒音・止撮]

-i韻：[舌音・止撮]、[齒音・各撮入声]

という条件が導き出せる。例外となるのは、Ⅲ群に属し溪母の“喫”と、Ⅱ、Ⅲ群両属の“是”である。

北京の近くの漢語方言には、これと同じ条件によって[tsɿ, tshɿ, sɿ]と[tʂɿ, tʂhɿ, sʰɿ]が分かれるものがある。例えば河北省昌黎県(河北昌黎、中国社科院(1984))の字音は、『撮要』と完全に一致する：

[-y韻]

tsɿ只~有枝

sɿ時事是使事

[-i韻]

tsɿ知直值治

tshɿ喫

sɿ十石拾食實識

昌黎方言の様相を『撮要』の漢語に当てはめれば、jy, cy, sy, ssyのyは、Ⅰ群はもとよりⅡ群においても、舌尖母音[ɿ]を表記したもの(声母は[ts, tsh, s])であり、一方、ji, ci, si, ssiのうち[舌音・止摂]、[歯音・各摂入声]に由来するもののiは、舌尖母音[ɿ]を表記したもの(声母は[tʂ, tʂh, sʰ])であると推定する。しかし、歯音字母j, c, s, ss下でのy, iの音価は、声母の音価が判明しない限り、最終的に決定できない。

3.2.2.3.2. üの対応

現代北京語のü韻母は、ui, iu, iuiのいずれかの表記を取る。

ui : jui居 ; cui取娶去除 ; sui徐俗

iu : iu餘

iui : iui語

全体的には、字母uで円唇性を表わし、字母iで前舌性を表わしていると解釈される。歯音j, c, sの後ろではiがuの後ろにつき、零初声の場合にはiがuの前についている(本資料に、歯音以外の声母とu韻母が結合する“緑女”などの表音例はない)。零初声の場合のiuとiuiの書き分け条件は、例が上掲の二字以外にはないこともあり、不明である。

uiは、現代北京語でuei韻母を持つ字の表音にも盛んに用いられる。このため、表記上、例えば徐俗=隨碎歲=誰水=suiの現象が起こる。

現代北京語ではu韻母を持つ“俗”はsuiと表記され、徐と同じ音注である。俗は中古の通撰三等韻であり、現代北京語の場合来、泥母と精組声母の下でi介音が脱落する変化が起こったために、xuではなくsuという音になったものである。現代北方方言にもü韻母に読む地点がある(一例を挙げるなら、山東省莒県、俗=徐=sy。比較：蘇素=su(石(1995)、同音字表))。

同様に、現代北京語でu韻母を持つ“除”がcuiと表記されていることは、この資料の表記対

象方言において、遇撰字及び入声の通撰字が、知三及び照三組声母の下で[u]ではなく[y](もしくは、捲舌子音の舌の構えで唇を円めて発する舌尖母音)と発音されていた可能性を示す。

一方、“除”以外の[知三/照三十遇撰/入声通撰]字“主囑住；出廚處；叔書贖樹豎”は、ju, cui, suiではなくju, cu, suと表記されている。しかし、この資料では、すでに述べたように(2.2.5.)、朝鮮語における歯音の直後の直拗対立の中和を反映して、j, c, sの後ろでの直拗表記に揺れがあるため、ju, cu, suがjiu, ciu, siuと等価なものとして注音された余地があり、そうするとこれらの表記例に見えるuさえ、iuが餘を表わしうるのと同様、[y](もしくは、捲舌子音の舌の構えで唇を円めて発する舌尖母音)を表わした可能性が否定できないのである。

このほか、精組・見組の細音字にもu表記がある。

u: ju句矩; su絮

このuも、上述の“主囑住”などの場合と同じ理由で、実は[y]を表した可能性がある。

3.2.3. 韻尾について

北京語の四種の韻尾 -i, -u, -n, -ng は、『撮要』においても -i, -w, -n, -ng で現れる。-w を除き、朝鮮語にも存在する発音である。

4. 兒化韻と兒化語彙の検討

4.1. 概観

兒化韻を記録していることは、最初に述べたとおりこの資料の特徴である。表記を見ると、編者が兒化現象に特に注意してこの書物を作ったことがよくわかる。ついでながら、筆者がはじめこの文献に興味を持ったのも、兒化韻の表記に目が留まったからである。

本稿では、“兒化”を合音現象、即ち二つの音節が融合して一音節を成す現象の一つであると見る。従って、接尾辞の“兒”がその前の音節と融合せずに独立の音節を保つ場合は、兒化とは呼ばず、その“兒”を“兒尾”と呼ぶことにする。

兒化が不bu+用yong→甬bengの類の通常の合音現象と異なるところは、それが兒化韻という一つの韻母体系を持った共時的な音声交替現象であることである。兒化韻は、介音、主母音、韻尾の三要素から成るといってその外形は通常の韻母と変わりがないが、通常の韻母の存在を前提として、これを兒化韻に変形させる音交替規則があつてはじめて成立する派生的韻母である点、通常の韻母とは本質的に異なるものである。この章では、兒化の音交替規則の適応前段階の韻母を“基本韻母”と呼ぶことにする。“基本韻母”の呼称は、賀(1982)に見える。例えば、現代北京語の韻母anが兒化によってarに交替するとき、anは基本韻母、arは兒化韻母である。

兒化韻の体系には、方言による多様性がある。具体的には、兒化韻は次の点で違いうる。

①兒化の起こる基本韻母の範囲の違い。全ての基本韻母が兒化しうる方言と、一部の基本韻母し

か兒化しない方言とがある。

②兒化韻の音声的性質の違い。北京語などの反り舌音付加式が最も良く知られているが、ほかにも鼻音韻尾をつけるタイプや母音韻尾をつけるタイプ、声調を交替させるタイプなど、方言により多くの類型がある(方言の兒化の類型については、太田(1984)、24-25頁に詳しい)。

③音交替規則の違い。同じ類型の兒化であっても、交替規則が異なれば、その適用結果としての兒化韻の体系が異なってくる。兒化によって基本韻尾の多くが合併してしまう方言もあれば、基本韻母の区別が比較的良好に保たれる方言もある。

以上の基本的認識を踏まえて、『撮要』の表記する兒化韻の分析を行う。なお、兒化は語彙の現象でもあるので、本章では資料中の兒化語彙を全て挙げることにした。

4.2. 兒音の表記方法

4.2.1. 漢字テキスト部分

いくつかの方法がある。

①漢字の下に“兒”を書き添える

前の漢字のすぐ下に、あたかも合体して一字を成すかのように扁平に書かれるのが特徴である。

“兒”の字体には若干の異体(兒、尢、叕など)が見られるが、本稿に引用するに当たっては全て“兒”で統一し、さらに“/”を置いて前の字との合体を示す。例：法/兒

①' 漢字の下に“兒”を書く

①とは異なり、“兒”が前の字と合体していない場合。引用時は“/”を置かない。例：空兒

②漢字の下に“乙”を書き添える

この符号も、前の漢字と一体化しているかのように書かれる。

-rの表記に乙を用いたことは、漢字を用いた朝鮮語表記法である吏読において、朝鮮語の対格語尾-rを示すのに乙を用いたことを想起させる。引用に当たって、①と同様“/”を置き前の字との合体を示す。例：法/乙

②' 漢字の下に“乙”を書く

②とは異なり、“乙”が前の字と合体して書かれていない場合。引用時は“/”を置かない。但し、実際の例は少ない。例：底些乙

③何も書かない

ハングル表記の側には兒化音が記録されているのに、漢字表記の側には兒音を示すいかなる漢字や符号も用いない。例：橋辺(ハングル表記ciaw-bier)

4.2.2. ハングル音注部分

本資料において、“兒”(及び“二”)の単字のハングル表記はer(얼)である。兒化した音節を表記する場合には、얼を用いず、ri-yr bad-cim(≡終声、本稿では-rと転写)を用いて、前の音節

との融合を端的に表わしている。接尾辞の“兒”が前の音節と融合していない(すなわち、兒化が起こっていない)音声を表わす場合は、“兒”がer(兒)と表記されて、独立した音節が示される。なお、『中華正音』での兒音表記状況は次のとおりである：漢字部分においては、“乙”に似た符号“ㄌ”が盛んに用いられ、やはり前の漢字と合体して書かれるが(上記の②に相当)、“兒”を前の字に合体させた例(上記の①に相当)は見られない。そのほか、“兒”を前の字と合体させずに書く(上記の①に相当)例も見られる。ハングル表記部分では、ri-yr bad-cim(≡終声)の例とともに、“ㄌ”を終声の位置に書いた例がかなり見られ、特徴的である。但し、≡終声と“ㄌ”の使い分けは不明で、どちらかが気ままに用いられているように見える。“兒”が前の音節と融合していないときにer(兒)が表記される点は、『華音撮要』の場合と同じである。なお、『你呢貴姓』(福田1995a, 1997)にも、兒化音の表記が見られるが、本資料との比較は今後の課題としたい。

4.3. 兒化語彙の分析

4.3.1. 主母音が a

法/兒～法/乙	par
走法/乙	zyw-par
退法	tui-par
住家/乙的	ju-jiar-di
伴/兒	bar
頑/乙	oar
照單/乙	jiaw-dar
馬褂/兒	ma-goar
破褂兒	po-goar

主母音が a である -ar 表記は、a, ia, oa 韻及び an, oan 韻からの r 化韻に見られる。ハングル表記のこうした様相から推測されることは、この資料の漢語が、現代北京語におけると同じく、基本韻母 -a(a, ia, ua), -ai(ai, uai), -an(an, ian, uan, üan) を合併させるタイプの兒化韻体系を持つことである。現代北京語(及び普通話)の兒化韻では、兒化によって上掲の三群の基本韻母が合併し、ar, iar, uar, üar¹²の四つの兒化韻が構成される。但し、方言の中には、この合併が起こらず、基本韻母 a, ia, ua は兒化韻[ar, iar, uar]となって独立し、基本韻母 -an と -ai に対する兒化韻[ar, iar, uar]からの区別を保つものがある(例えば、河北省昌黎県の城関、石門、朱建垞¹³)。この資料の兒化韻も、あるいは昌黎式の、[ar]と[ar]を区別する兒化韻であった可能性があるが、この問題を明らかにするにはハングル表記の精密さが十分でない。

現代北京語で ar に交替する基本韻母群の一つである -ai(ai, (iai), uai) の兒化例は一つしかない。それは：

一袋烟 i-d@ir-ien

である。注目すべきことに、ハングル表記は、“袋” d@i の -i 韻尾が兒化してもそのまま残った形を示している。この体系では、従って、基本韻母と兒化韻母の間に

基本韻母	-a	-an	-@i
	└──────────┘		↓
兒化韻母	-ar		-@ir

の関係があることになる。-a の兒化韻と -an の兒化韻が区別されていたがハングル表記では反映されなかった可能性まで考えると、基本韻母 -a, -ai, -an が兒化に際して合併を起こさず、すべて独立した可能性もある。

4.3.2. 主母音が e (その1)

基本韻母が e, ie, ue であるものの兒化例。用例の出現度数は多いが、まとめれば“箇”“些”“過”の三字と、兒化の例かどうか疑問のある“劣悪”の例があるのみである。

このグループは、現代北京語では er, ier, uor に相当する。本資料は uer に相当する兒化韻の例を欠く。

*e 「箇」

怎嗎箇/兒～怎嗎箇/乙	jy-mu-ger
原封原箇/乙的	uien-pung-uien-ger-di
箇个兒	ge-ger

*ie 「些」

底些/兒～底些/乙	di-sier
些/乙	sier
裡些	ni-sier

“些”には、漢字面では r 化の標識がありながらハングル表記では -r のつかない例が一つだけある：

那些/乙个	na-sei-ge
-------	-----------

☆劣

劣悪	nier-e
----	--------

“劣悪”は不明語である。二箇所に現われる：

1. 他劣悪張口就罵人咧(14b・1行目)

『中華正音』による朝鮮語訳：gy nom-i ib-yr ber-ri-mien sa-ram-yr iog-han-da(朝鮮語からの和訳：そいつは口を開けば人を罵る)

2. 他劣悪不説理(14b・5行目)

『中華正音』による朝鮮語訳：gy nom-i ni-ryr mar-ti an-ki-ro(朝鮮語からの和訳：そいつが理を話さないので)

漢語「他劣悪」の部分を取って日本語に訳せば「彼は“劣悪”で、…」のようになり、朝鮮語訳は「他劣悪」全体をgy nom-i「そのやつが」と訳していて、少なくとも直訳にはしていない。

*ue「過」

使得過/兒 ssy-de-guer

4.3.3. 主母音が e(その2)

基本韻母が ien, iuen であるものの見化例。

*-ien 韻

☆辺

進邊 jin-bier

橋邊 ciaw-bier

西邊/乙 si-bier

河那邊/乙 he-na-bier

辺門 bier-mun

☆点

一点/兒～一点/乙～一点 i-der

打点 da-der

☆前

這個前/乙～這個節 jie-ge-cier

漢字面“節”は朝鮮漢字語 si-jier(時節)などにひきづられた表記か。

☆錢

小錢 ssiaw-cier

*-uien 韻(遠)

走不多遠 jyw-bu-do-uier

このグループは、現代北京語では iar, üar に見化するものであり、その主母音/a/の音声的実現は a, ai, an の見化韻 ar 及び ua, uai, uan の見化韻 uar におけるそれとほとんど変わらない。しかし、この資料のハングル表記では、両者が -ar と -er の違いを見せている。

4.3.4. 主母音が e(その3)

*-ing 韻(明)

明个～明/兒个 mier-ge

本資料中、基本韻母が -ng であるものの兒化例は、この一例だけである。

4.3.5. 主母音が o

一例のみ。ただ、用例の出現度数は多く、漢字面の変種に富む。

昨/兒个～昨/兒個～昨/乙个 jor-ge

4.3.6. 主母音が y

*yn韻

底根～底根/乙 di-gyr

*y韻

閑事 sien-syr

銀子 in-jyr

*yw韻

稱頭/乙 cieng-tyr

yw 韻の兒化韻は通常、ywr または ur である(後述、4.3.8.参照)。

4.3.7. 主母音が i

*in韻

使筋 ssy-jir

對盡/乙 dui-jir

准信/兒 jiun-sir

漏信/兒咧 nyw-sir-nie

今兒个～今/乙个 gir-ge

*i 韻

照卑/乙 jiaw-bir

皮兒 pir

年記兒 nien-jir

照卑/乙は、「照單/乙」とあるべきところである。“單”を“卑”に書き誤った例と考えられるが、誤字である“卑”に、“卑”が兒化した音形と関連付けられそうな“bir”なる音注をつけている。この誤記は、この資料の音注の性質を説明するものであろう：音注をつけた朝鮮人と思しき人物は、少なくとも中国人の発話を直接書き取ったのではなく、自身が中国語音を知っていて、漢字面を見ながら音注を付けていったのである。そうでなければ、“jiaw-bir”といういわば幽霊語形を記録するはずがない。なお、『中華正音』においては、該当箇所を正しく“照單”につくり(接尾辞“兒”や兒化を示す他の符号などは付いていない)、jiao-danというハンゲル音注をつけている。

i 韻母に兒が続くときは、兒化せず、独立の音節 er を保つ場合も多い(後述、4.3.9.参照)。

4.3.8. 主母音が u

この例は非常に多い。この兒化韻を持ついくつかの単語(時候兒など)の出現頻度が大きいため、多いという印象がいつそう強められている。

基本韻母が yw、u、un であるものの三つに分けられる。現代北京語では、この三者に対する兒化韻は全て区別されて、それぞれ our、ur、uer となるが、本資料では、基本韻母 yw が ywr と交替する例が散見されるのを除き、一律に ur となって表記上区別がなくなる。

*yw韻

yw韻の兒化韻は、ywr または ur で現われる。両者の使い分けは不明で、おそらくは自由変異であろう。

☆頭

初頭 cu-tur~cur-tur

年頭/乙~年頭兒 nien-tur

上頭 siang-tywr

一頭/兒~一頭/乙~一頭 i-tywr~i-tur

賺頭/兒 joan-tur

名頭/乙 ming-tur

老頭/乙 naw-tur

襪子頭/乙 oa-jy-tur

前頭 cien-tur

☆口

惱口/兒~惱口兒 naw-kur~naw-kywr

接口/乙 jei-kywr

門口/兒~門口/乙~門口 mun-kywr~mun-kur
(mun-kour)

家口兒~家口/兒 gia-kywr

門口のハングル音注のうち mun-kour は孤例である。

“口”の兒化例には、次のものもある。

張口兒 jang-kyw-ur

剛口/兒 gang-kyw-ur

これはハングル表記において“兒”が独立の音節を保つケースに当るが、“兒”の字音そのままの“er”ではなく、直前の“口”の韻尾の影響を受けて主母音が u に変わった ur が表記されているという点で、独立を失いかけた段階と言いうる。

☆候

時候/兒～時候/乙 sy-hur

多候/乙 do-hur

打候/乙 da-hur

一候/乙 ir-hur～i-hur

打候は『中華正音』の朝鮮語訳 ie-re-i 「皆が」を参照すると、すなわち大伙兒であることがわかる。

一候は『中華正音』の朝鮮語訳 han-cam 「ちょっとの間」を参照すると、すなわち一会兒であることがわかる。

現代北京語の発音では、時候兒の“候兒” hour、大伙兒の“伙兒” huor、一会兒の“会兒” huer は全て異なるが、本資料では同一の漢字“候”が当てられ、ハングルによる音注にも違いが見られない。これが当時朝鮮人が触れていた口頭語の実態を反映するものである可能性ももちろんあるが、区別を音注が書き分けられなかった可能性のほうが大きい。外国人による、異なった言語の字母を用いた表記には限界性があることを思うべきである。

* u 韻

百數兒 b@i-sur

照顧/乙 jiaw-gur

* un 韻

開門 k@i-mur

掛棍 goai-gur

光棍/乙 goang-gur

“掛棍”は、ハングル表記と朝鮮語訳(“di-pang-i(杖)”)から判断して、すなわち拐棍である。

“棍”字は、本資料中に見化しない用例がないので、基本韻母形式を知ることができないが、当然 gun であると推測される。

この三例に出現する -ur 表記は、現代北京語の uen に対する見化韻母 uer の相当物を表記したものであると結論される。特に、“棍”の見化形式 gur が、先に見た“過”の見化形式 guer と区別されていることに注意。この区別は、現代北京語の見化音体系においても並行的に見られる(過兒 guor : 棍兒 guer)。

4.3.9. “兒尾”型の語例

* 基本韻母が i

理/兒～理兒 ni-er

皮兒 pi-er

光皮兒的 goang-pi-er-di

細ゝ兒 si-ゝ-er

* 基本韻母が -u 韻尾韻母

大道兒 da-daw-er

一共老兒 i-gung-no-er

滿流兒的 man-nu-er-di

急流兒 jir-nu-er

* 基本韻母が -ng 韻尾韻母

過樣兒的 gue-iang-er-di

照亮兒 jiau-nang-er

防想兒 pang-siang-er

聲兒 sing-er

空兒 kung-er

“兒”が前の音節と融合しない“兒尾”のタイプは、“兒”直前の韻母がiのもの、-u 韻尾であるもの、-ng 韻尾であるもの、に多い。特に韻尾が -ng のものは、『撮要』ではほとんどが兒尾型であり、兒化した例は“明个～明/兒个”mier-ge 以外にない。

4.3.10. “兒”に対応する音注を欠く語例

那些/乙个 na-sei-ge

臉皮兒 nien-pi

送信/兒 ssiung-sin

媳婦兒 si-pu

大道兒 da-dau

外頭/兒 oai-to

拳頭/乙 coien-twu

大來頭/乙嗎 dar-n@i-twu-ma

上手兒 siang-siu

後/兒个 hwu-ge

記聲/乙 ji-sing

漢字表記には“兒”字あるいは兒化表示手段が記されているにもかかわらず、ハングル音注の側には対応するものがない事例。このような齟齬があるので、漢字のテキストの編纂者が接した漢語と、ハングル音注をつけた人物の接した漢語とは別々の漢語で、かつ兒化の現れる語彙の範囲が違っていた可能性がある。

4.4. まとめ

以上をまとめるに、『撮要』の言語には、“児化”と“児尾”の両方が見られる。

児化の起こった例のある基本韻母とその児化韻母は次の通りである：

基本韻母	児化韻母
a, an	ar
ia	iar
oa oan	oar
@i	@ir
e	er
ie, ien, (ing)	ier
ue	uer
uien	uier
o	or
y, yn, yw	yr
i, in	ir
yw, u, un	ur

児化が起こらず、児尾が接尾する基本韻母：

i, aw, o(<aw), u(<iw), iang, ing, ung

こうした、一部の韻母に児化が起こらない状態は、現代漢語方言にも見られる。例えば河北省保定、易県、清苑、安国、定県(現定州市)、博野では、-i, -n 韻母字にのみ児化が起こり、その他の韻母には児尾がつくという(賀・銭・陳(1986))。『撮要』の場合、児化が盛んに起こる基本韻母は韻尾がゼロ(i 韻母を除く)と-nのものが中心であって、-w, -ng 韻尾字が児化しにくい。この点河北省の保定などに通じる。ただ -i の児化例が何故か非常に少ない(4.3.1.参照)。*[i]*は音声的には児化しやすいとされており¹⁴、『撮要』のこの状況は、i 韻母字には児化しない語例が少なくないこと(4.3.9.参照)と合わせ、やや特殊である。

5. 終わりに

以上、『華音撮要』の音注から、この会話書の漢語の音韻体系を探ってきた。本資料第二部分や『華音啓蒙諺解』、『你呢貴姓』、『中華正音』などの音注との比較、及び現代華北・東北方言との比較などは今回十分にできず、今後の課題として残った。音韻以外の言語要素に至っては、ほとんど手付かずのまま終わってしまった。会話文の語彙と文法の分析など、今後の課題としたい。

最後に、『撮要』に現れる特殊な音形式の二音節語を挙げる。同化や韻尾の脱落が観察されるものが多い。これらの語形は実際の発音を耳で聞き取ったものか、あるいは方言的要素であると

思われる。口語の実態をよく表しているので、列挙し、参考に供す。

沒有 mu-i~me-ie~mu-iw

説明：最も多いのは mu-i である。me-ie は見かけ上韻尾 -w が脱落しているようであるが、語気助詞“啊”の変音の記載から実際には -w のあることがわかる：沒有啊 me-ie-oa (4b4行目等)

甚嗎 si-ma

怎嗎 jy-mu~jy-ma (例えば、~着のとき)

這裡 jei-ri (“這”は、他ではjieと表記される場合が多い)

是咧 sir-nie

是得 si-de

上二条説明：“是”は、この二つ以外ではほとんど常にsyと表記される。

今年 gi-nien~ji-nien

言語 ian-u~iang-iui

瀋陽 si-iang

難為 nang-ui

暖和 nang-ho

告訴 gaw-siung

何時 he-sung~he-siung

注

1：本稿は、1998年9月13日、愛知県立大学で開かれた第12回「対音対訳資料研究会」において、当時東京都立大学大学院に在学中であった筆者が行った発表「『華音撮要』について」のレジューメを必要に応じて加筆し、論文にまとめたものである。筆者は発表後、この文献に対する研究を怠っていたが、当時研究会で指教をいただいた竹越孝先生(愛知県立大学)の強い勧めもあり、今回執筆を思い立ったものである。ここに記して、お教え戴いた竹越先生はじめ諸先生方の学恩に感謝の意を表したい。

2：本稿でのハンゲルのローマ字転写は次の通りである。

子音。

ㄱ/g/ㄴ/n/ㄷ/d/ㄹ/r/ㅁ/m/ㅂ/b/ㅅ/s/ㅇ/ng/ㅈ/j/ㅊ/c/ㅋ/k/ㅌ/t/ㅍ/p/ㅎ/h/ㅇg/ㄸ/dd/ㅃ/bb/ㅆ/ss/ㅈj/ㅇv

なお、零初声の(ㅇ)は、必要な場合のみ(')で転写し、通常の場合は転写しない。

母音。

ㅏ/a/ㅑ/e/ㅓ/o/ㅜ/u/ㅡ/y/ㅣ/i/·@

ㅏ ia/ㅓ ie/ㅜ io/ㅠ iu

ㅑ oa/ㅕ ue

ㅗ ai/ㅛ ei/ㅝ oi/ㅟ ui/ㅡ yi/ㅣ@i

ㅛoia/ㅜioie/ㅟuie/ㅟiuie/ㅑoi/ㅓiei/ㅕuei/ㅠiu

組み合わせの下部(終声の位置)に置かれて-u韻尾を表わすㅜuは、本稿ではwで転写する。例：

ㅟyw

なお、音節の区切りは、ハイフンで表わす。

- 3：『華音啓蒙』、『華音啓蒙諺解』については、小倉進平著『増訂補注朝鮮語学史』において、中国語読本として紹介されている(579-580頁)。
- 4：例えば姜信沆(1980)や、鶴殿倫次氏による一連の論文(鶴殿(1985, 1992, 1994, 1995))。
- 5：『中華正音』(東京大学総合図書館蔵)の閲覧に当たって、筆者は遠藤光暁先生(青山学院大学)の配慮を受けた。ここに記して、感謝の意を表します。
- 6：朝鮮語学では、『訓民正音解例』(1446)以来、音節を初声、中声、終声の三つに分ける。初声は音節初頭子音、中声は母音、終声は音節末子音にそれぞれ相当する。『撮要』においてハングル表記された漢語の韻尾は、-iのみが中声扱いで、-uを含めた他は終声扱いである。
- 7：『撮要』の示す漢語の音韻体系が現代北京語のそれに極めて近いことに鑑みて、本稿では音形式の説明をする際に現代北京語音をたびたび参照する。現代北京語音を参照する場合は、拼音表記をそのまま用い、ハングルのローマ字転写等とまぎれないよう、下線を引いて示す。
- 8：周(2002)に、“真是[tʂhən⁵¹ʂɿ¹]”という観察がある。
- 9：『中原音韻』の支思韻に属する止撰開口字“資雌思”などを含む。
- 10：近代以降、官話系方言で-i介音を生じた二等字“家皆江”などを含む。
- 11：Hartman(1944)参照。参考までに、藤堂(1958)33頁所載の、同様の三母音解釈に基づく現代北京語韻母表を、拼音と対照させて掲げる(原文の/a/を/e/に、/ɿ/を/i/に代えてある。右側に括弧に入れたのが拼音表記)。

a(a)	wa(ua)	ja(ia)	/
aj(ai)	waj(uai)	/	/
aw(ao)	/	jaw(iao)	/
an(an)	wan(uan)	jan(ian)	jwan(uan)
aŋ(ang)	waŋ(ang)	jaŋ(ang)	/
e(e)	we(uo)	je(ie)	jwe(üe)
ej(ei)	wej(uei)	/	/
ew(ou)	/	jew(iou)	/
en(en)	wen(uen)	jen(in)	jwen(ün)

ɛŋ(eng) wɛŋ(ueng/-ong) jɛŋ(ing) jwɛŋ(iong)

i(-i舌尖母音) wi(u) ji(i) jwi(ü)

12: 現代北京語の兒化韻を参照する場合も、声母・基本韻母を参照するときと同様、拼音表記を用いる。但し、-i, ei, en; i, in; uei, un; ü, ün を基本韻母とする兒化韻のみ、基本韻母の綴りを残す拼音の形態主義を排して、ər, iər, üər, uər と表記する。

13: 河北昌黎、中国社科院(1984)34頁《昌黎五处和北京韵母对照表》参照。昌黎県の方言の兒化韻は内部差異が大きく、同じ昌黎県でも曹東莊、陳官屯の兒化韻は卷舌音 -r ではなく母音の -ɯ, ə- を接尾するタイプとなっている。

14: 李思敬(1986)、75-79頁の議論を参照。李説をかいつまんで紹介すれば、i などの前舌高母音は、捲舌音とは同時調音ができないが、舌位をほんの少し調整するだけで捲舌音そのものとするため、兒化が容易である、ということになるろうか。

参考文献

鵜殿 倫次 1985 『『華音啓蒙諺解』の漢字音注の特質』、愛知県立大学外国語学部紀要第18号(言語・文学編)153-198頁。

— 1992 『『華音啓蒙』入声字の音注(1)ie と iei の書き分け』、愛知県立大学外国語学部紀要第24号(言語・文学編)233-250頁。

— 1994 『『華音啓蒙』入声字の音注(2) i と y の書き分け』、愛知県立大学外国語学部紀要第26号(言語・文学編)219-241頁。

— 1995 『『華音啓蒙』入声字の音注(3) u, iu, iui(ui) の書き分け』、愛知県立大学外国語学部紀要第27号(言語・文学編)389-409頁。

遠藤 光暁 1990 『《翻訳老乞大・朴通事》漢字注音索引』。中国語学研究『開篇』単刊No.3、好文出版。

太田 斎 1984 「山東方言における『兒化』」、東京都立大学人文学報166、23-51頁。

小倉 進平【著】、河野 六郎【補注】1964 『増訂補注朝鮮語学史』。刀江書院。

日下 恒夫 1980 『『朝鮮資料』の中国語』、関西大学東西学術研究所所報第32号1-2頁、1980年9月30日。

藤堂 明保 1958 「北京語の音韻」、『中国語学事典』、江南書院所収。

福田 和展 1995a 「《你呢貴姓》の言語に関する初歩的分析」、語学教育研究論叢(大東文化大学)第12号189-207頁。

— 1995b 「《你呢貴姓》翻字」、『開篇』(好文出版)第13号113-134頁。

— 1997 「《你呢貴姓》の言語に関する初歩的分析その2—校注—」、語学教育研究論叢(大東

- 文化大学)第14号79-103頁。
- 李 基文【原著】1975『韓国語の歴史』。村山七郎監修、藤本幸夫訳。原書『改訂国語史概説』(朝鮮文)は1974年刊行。
- 姜 信沆1980『華音啓蒙諺解』内字音yi音系」、東方学志(延世大)23・24号167-192頁。
- 北大中文系 1989《汉语方音字汇》。第二版。北京大学中文系語言学教研室編, 文字改革出版社。
- 河北省昌黎县县志编纂委员会、中国社会科学院語言研究所 1984《昌黎方言志》。上海教育出版社。
- 贺 巍 1982《获嘉方言韵母的分类》。《方言》1982年第1期22-36頁、また賀巍《汉语方言文稿集》(1987、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)所収。
- 1986《东北官话的分区(稿)》。《方言》1986年第3期172-181頁、また《汉语方言文稿集》所収。
- 贺 巍、钱 曾怡、陈 淑静 1986《河北省北京市天津市方言的分区(稿)》。《方言》1986年第4期241-252頁、また《汉语方言文稿集》所収。
- 侯 精一、温 端政 1993《山西方言調查報告》。山西高校联合出版社。
- 李 思敬 1986《汉语“儿”音史研究》。商务印书馆。
- 石 明远 1995《莒县方言志》。語文出版社。
- 周 一民 2002《北京口语里的强调变音》。周一民著《现代北京话研究》, 北京师范大学出版社, 77-78頁。
- Lawton M. Hartman 3rd(1944) “The Segmental Phonemes of the Peiping Dialect”.
Language, 20, pp.28-42.

(附録)『華音撮要』同音字表 (1)

(凡例)

- ・縦軸に声母、横軸に韻母を配する。
- ・下線を引いた字は、兒化した用例のみが見えるもの。対応する基本韻母形式の位置に列した。
- ・韻母 n, l に対応するハングル表記は、実際には両方とも n であるが、本論2.2.3.で考察したように区別がないわけではないので、泥/来母の別に従い一応分けておいた。

	a	ia	oa	e	ie	ue	oie	uie
b	八拔把 罷悖~道							
p	怕;發法 派打~							
m	馬碼罵 嗎							
d	打大			得				
t	他塌							
n	拿哪那							
l	拉蠟				咧			
r								
g		家傢~伙 架價;街	刮~風寡 掛樹	哥擱各箇		鍋國菓過		
sg								
k				可卻客				
h			花化話畫	喝合何和 河閤				
j	咱砸雜; 家	加家稼	抓		這			
c	查				車			
s		匣下;少 多~			些;捨~不 得		雪	
ss		下;小;少						
zero	啊	呀啲	瓦	鄂惡	爺也;有沒 ~	我		月

同音字表 (2)

	o	y	i	u	iu	@i	oai
b			比筆必	不否		白伯百	
p	破;暴		劈皮匹	舖;夫袱福付咐 婦		牌	
m	磨			模~樣木嗎怎~;沒 ~有每~一		買賣	
d	多		的底地弟	都肚		歹大老~ 待帶袋 戴;在	
t	駄托;頭 外~		提替	頭;村~子		太	
n	挪張~		你呢				
l	騾落;嘮 老		離李裡理禮利 例	路蘆;籠燈~;流滿 ~兒		來	
r			理妙~裡這~、那~ 麗				
g		給	雞幾;今~年	鞞骨故雇顧;過 ~不是		該蓋	怪掛~ 棍
sg							
k				哭苦褲;口		開	快塊; 怪~冷
h	活火伙傢 ~夥貨;和 暖~	黑		胡葫糊鬍戶;候		還海害	壞
j	昨坐作 座	子字自; 怎~麼;只~ 管枝	知直值治;急幾 季計;今~年	主矚住;究就; 句矩	就	再在	跬
c	矧	次	齊;欺騎起氣; 喫	出初廚處		財纔菜; 柴	
s		思;時事 是	西席媳細;喜; 十石拾食實識 是甚~麼;藩~陽	叔書贖數樹豎; 絮			
ss		死四;使 事	十				
zero			一依以易益意; 有沒~;日	屋吳無五誤;語 言~	餘;有 沒~	噯	外

同音字表 (3)

	ei	iei	uei	ui	iu	aw	iaw	ew	yw	iw	uw
b	背北 備;別					包保褙~袱		包			
p				陪;費			標	袍跑			
m				每		帽	妙				
d				堆對		叨到倒道	吊彫貂			丟	
t	帖			忒退		討套;條	調		頭透; 鬪		
n	內					惱鬧字				牛	
l	勒					老	遼了少不~		漏	留六	
r											
g			櫃	規歸 貴		糕告	叫教	勾介 詞;夠 字;高	溝狗	九舊	
sg											
k				虧		烤靠			口		
h				回會		毫貉好號			後		
j	着這; 接借	這		嘴;居		遭早噪;着 和不~找照; 焦嚼	交腳叫; 照		走; 州	酒就	
c				取娶; 去;除		草;瞧;橋	橋瞧;招		湊	秋求	
s	賒;些 寫卸 謝			隨碎 歲;徐; 俗;誰 水			笑;少			收手受	說
ss							小笑;少				
zero		爺也 夜;惹		圍未 喂爲	語 言~	熬襖	姚要若			友有 又	

同音字表 (4)

	an	ian	oan	oian	en	ien	oien	uien	yn	in	un	iun
b	半伴 辦;販				本	邊遍 鞭變						
p	盤;翻 煩飯					偏					分墳	
m	瞞滿 慢					綿面				閩	門們	
d	單但 蛋		短	短	店 點	店 惦					囤	
t					天	天					村[衣 屯]	
n	南難					年念						
l						連臉				林臨	輪論	
r												
g	敢趕		官關 管						根	今	棍	
sg	幹趕 子								跟懇			
k	看		寬						肯		網	
h	含		歡還 喚換						狠		混	
j	暫; 站; 賤;件	件 見 建 間	賺 轉; 眷							津盡對 進;斤 金筋; 針	尊	准; 均
c			穿船			千前 錢;纏	全 拳 勸		陳		存;春	
s			算	算		閑				心新 信;身		
ss	三	三; 算				先線; 嫌現						
zero	安鞍 按	言 眼	完頑 晚萬	軟		煙;緣 ~故;然		元原 願遠		銀;人 認	文問	雲 運

同音字表 (5)

	ang	iang	oang	eng	ieng	yng	ing	ung	iung	er
b							冰並			
p	方防妨放 房			朋;風			憑	封風 鳳		
m	忙			朦黑 ~~			名明命			
d	償上~、勾~					燈等 戩	頂定	東懂 凍動		
t	糖塘趙字						听停	通同 桶		
n	娘難-爲 暖-和					能		弄		
l	朗硬~;亮	糧兩量				冷	零嶺嶺另			
r								弄胡 ~、拿~		
g	剛		光			更庚	景	工共		
sg	剛					更				
k	扛		況			吭		空		
h	行		凰黃			橫				
j	張-口張- 挪掌漲;薑 講	將;薑;張 量詞帳賬	庄粧 裝		正		睛;京更三 ~;津天-圍; 睜正		中 重 種	
c	償場				稱成 城盛	層	情;成	從		
s	相	相廂想 像;向;商 晌上				生牲 繩	姓;興行; 聲	時何-	訴告 -時 何-	
ss		想							兄; 送	
zero		陽楊養 樣;言-語; 嚷讓	王往 忘望				應硬		用	兒 二